

居酒屋勤務・ツアーガイド・駅舎管理 — 外国人ならではの視点で島の魅力を仕事に

マッシュュー・トーマス・ピーターセン

人情味あふれる瀬戸内海の島

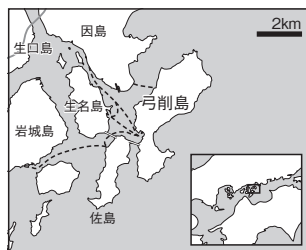
私は、ニュージーランド北島の西海岸にあるニュープリマス出身です。二〇一九年一月に妻のピーターセン・ももこ（以下、モモ）と二人で弓削島に移住し、現在は、地元の寿司居酒屋「ととや」の従業員、町営施設「ゆげ海の駅舎ふらっと」の管理のほか、ツアーガイド、ドローン撮影、翻訳業など複数の仕事を行ないながら暮らしています。

モモとの出会いは約五年前、私が友人と一緒に三週間の旅行で日本を訪れた時でした。その後、彼女がニュージーランドに来ることとなり、一年ほど国内最大の都市であるオークランドで一緒に過ごしました。しかし、都会には自然も少なく、人々も田舎ほどフレンドリーではありません。都市での暮らしに疲れた私たちは、休日を利用して郊外へ

キャンプやドライブへ出かけるなど、しだいに田舎暮らしに憧れるようになっていきました。

モモの一時帰国を機に、私も再び日本へ。この時は三カ月間の滞在予定で、その後、日本へ移住することになると想像もしていませんでした。滞在中は、おもにモモの地元である兵庫県で過ごしていましたが、縁あってニュージーランドの友人サム・スプリングット（以下、サム）の家族が住んでいる弓削島へ行くことになりました。サムは、船大工として、島でオーストラリア人所有のカタマラン（双胴船）の整備・管理などを行ない生計を立てています。

初めての瀬戸内。海は穏やかで、島が並ぶ景色は非常に美しく、感動しました。弓削島の人々は、とても親切でフレンドリー。どこの誰ともわからない私たちに対して、島の子ども大人もみな、すれ違いざまに挨拶をしてくれま



弓削島：上島諸島東端の島。面積8.68 km²、周囲18.0km、人口2,980人（令和3年1月末現在）。歴史が古く旧石器時代の石器が発見されている。江戸時代には海の宿駅として本陣が置かれ、明治時代以降、造船や船員養成で栄えてきた。



オークランドから車で2時間ほどの郊外。



初めての弓削島。左から妻のモモ、筆者、友人のサム。

した。陶器の宗兵衛窯の場所を上島モーターズの冨田淳さんに尋ねたところ、同窯へ電話をして営業中かどうかを確認してくれただけでなく、現地まで一緒に案内してくれました。また、食堂まるふ農園へうかがった際には、地元の方から「上島町は良い所なのでぜひ移住してきてください」と言っていたなど、島人の温かさが深く印象に残りました。

弓削島は離島ではありませんが、島内に複数のWiFiスポットが整備され、スーパーが二軒、リゾートホテルや民宿などの宿泊施設、居酒屋・お好み焼き屋・カフェなどの飲食店が複数あり、生活環境が充実し

ています。まるでニュージーランドの良いところをすべて切り取ったように、きれいなビーチがあり、ハイキングもできて、居心地の良いお店もある、本当に魅力的な島だと思います。私は、一度で弓削島のことを好きになり、三ヶ月の滞在中に二度訪問しました。

ニュージーランドから弓削島へ

二回目の訪問では、観光ではなく、私たちがこの島に住んだらどうなるだろうという視点で、島内のあちこちを回りました。

当初はニュージーランドへ帰り、オークランドではなく国内の田舎に住もうと計画していました。じつはニュージーランドの田舎はとても不便で、どこへ行くにも時間がかります。弓削島の方がよほど便利で、役場・銀行・郵便局・スーパー・医療機関などがコンパクトにまとまっています。また、フェリーに数分乗れば隣の因島へ渡ることができ、二四時間営業の大型スーパーやホームセンターへ行くこともできます。こんなに便利な離島は、日本国内はもちろん世界中でも珍しいのではないのでしょうか。実際に、ニュージーランドなどからやって来る私の友人たちも、みんな弓削島の利便性の高さに驚きます。

二度目の弓削島訪問で、私たちはこの島へ

の移住を決意しました。一旦帰国し、その後約四カ月という短い期間で弓削島に移り住みました。これだけ早く移住が実現したのは、友人サムらの協力のおかげです。

寿司居酒屋でアルバイト

弓削島に移り住んだ当初、私たちが最も心配していたのは仕事のことでした。なぜなら当時の私は、日本語を話すことがほとんどできなかったからです。日本人と上手くコミュニケーションを取れない状況で、自分には何ができるのだろうと、とても悩みました。

一方、モモはフルタイムで働ける職場を探していました。都会で働いた経験がなく、いくつかの仕事を掛け持つことで生計を立てていく、という発想がなかったからです。

その後、島ではフルタイムの仕事が少ないため、パートタイムなどを複数組み合わせながら暮らしている方々がたくさんいることを知り、弓削島での自分たちに合った働き方・暮らし方を考える機会に繋がりました。

じつは、モモは移住前から



寿司居酒屋「ととや」にて。中央が岩越竜司大将。

知り合いを通じて弓削島にある寿司居酒屋「ととや」でアルバイトとして働くことが決まっており、私はサムの行なっているポート管理の仕事を手伝って収入を得ていました。モモが「ととや」の仕事に慣れてきたころ、日本語が話せない私もここで働かせてもらえないかと、相談に行きました。意外にも店の大将・岩越竜司さんは、あっさりOK。今となつては楽しい思い出ですが、最初はお互いに何を言っているのかわからず、ジェスチャーや翻訳機を使いながら、なんとか意思疎通をしていました。「ととや」で働いて約二年、今では、大将の話すこともほとんどわかるようになりました。弓削弁も覚え、失敗したときの「おおちゃんぽ（大失敗）じゃ!」「みやすい（簡単）」などは日常的に使っています（笑）。大将が、私たちのことをお客さんなどに紹介してくれるおかげで、島の知り合いもずいぶん増えました。

ちなみに岩越大将は、京都調理師専門学校を卒業後、同じ京都にある料亭で十年以上経験を積み、故郷の弓削島に帰ってきて今の店を始めたそうです。大将からはお寿司の握り方も教えてもらい、私の友人や家族が遊びに来た時などには、私自身が握ったお寿司を出させていただいたこともあります。また、ニュージーランドの仲が良い友だちが上島町に移住してきた際には、半年間ほど「ととや」のホール担当として採用していただくなど、大将には大変な恩義を感じています。

外国人向けサイクリングツアーを開始

私は、上島町の魅力をたくさんの人々に伝えることで、大将をはじめお世話になっている島の方々に恩返しをした
いと、二〇一九年九月に個人事業「Kamijima
Tours」を立ち上げ、インバウンド向けの上島町内サ
イクリングツアーガイドを始めました。

ツアーでは、上島町内の弓削島・佐島・生名島^{いきな}を周りま
すが、島内にあるおすすめのカフェなどに立ち寄り、地元
の方々との会話（コミュニケーション）を楽しむことができま
す。サイクリングの後には、ツアー客と一緒に弓削島にあ
るリゾートホテル「インランド・シー・リゾートフェスパ」
の大浴場へ行くこともあります。一般的に、外国人は入浴
のルールがわからずお風呂に

挑戦するのが怖いという方が
多いため、私が事前に入浴の
作法などを説明しています。

私は、フェスパの露天風呂か
ら眺める景色が大好きで、島
に住んでいることに幸せを感
じるひと時を過ごせます。

夕食は、私が働いている
「ととや」のほか、地元の居
酒屋を案内し、瀬戸内海の家



ツアーでは下弓削の秋祭りにも参加した。

の幸を楽しみながら、島の人々と触れ合うことができるよ
うに工夫しています。ちなみに滞在時間が長ければ長いほ
ど、上島町の魅力を感じることができると考え、ツアーで
は、町内での宿泊をすすめています。

ツアー利用者の声として最も多いのは「地元の人たちの
コミュニケーションを体験することができ、自分も島に住んでい
るような特別な感覚になった」というものです。「日本の
旅行で一番印象的な旅だった」という参加者も多く、なか
には、弓削島に移住したいと話すとオーストラリア夫婦や、
数カ月の長期滞在を希望する人もいます。実際に、ナンシ
ー・ジーさん（ニュージールランド建築家兼大学院生）は、ツ
アーをきっかけに上島町に大きな関心を持ち、町内の観光
スポットに置くベンチをデザインして、採用されました。
ベンチの制作が今年の四月から始まるため、二月に町に移
住し一年間ほど滞在する予定です。私は、参加者をこれだ
け魅了できる弓削島、上島町には、ものすごいパワーが秘
められていると感じています。

誰でも立ち寄れる駅舎運営を目指して

このほか私たちは、二〇二〇年四月から町営施設「ゆげ
海の駅舎『ふらっと』」の管理業務を請け負っています。

具体的な業務内容は、ビクター桟橋での受付や観光案内な
どで、ヨットで来島されたお客様に上島町を紹介していま
す。たまにお客様の船を見学させていただくことやお食事

をご一緒させていただくこともあり、楽しみながら仕事をしています。

海の駅舎は、ヨット客だけではなく、サイクリストや一般観光客、地元住民の皆さんも気軽に利用できるスペースとなっているので、いろんな方々と触れ合うことができる点も非常に有意義です。

最近の私たちの目標は、上島町を盛り上げるためのイベントを継続的に開催していくことです。これまでに、町内に住む外国人とその友人を招いての「大人の英会話 with ワイン」や高校生向けの国際交流などを行ないました。また昨年の夏は、「ととや」の岩越大将、飲食店「ゆげしまダイニング彩^{さい}」の

松村真助さん、「下弓削クラブ」の山上リーダーとともに、コロナ禍のためいろいろな場面で我慢を続けている島の子どもに少しでも夏休みを楽しんでもらおうと、町民限定の「こども夏祭り」を開催しました。地元の皆さんの協力もあり、コロナの感染者を出すこともなく祭りを楽しむことが



ゆげ海の駅舎「ふらっと」でのハロウィンウォークの準備風景。

できました。このほか一〇月にも「Kamijima Tours」の主催による子ども向け「ハロウィンウォーク」を実施しました。これは、仮装した子どもたちが下弓削エリアに設置したお菓子ポイントをめぐるもので、お菓子の設置場所の提供やイベント運営のボランティア、下弓削クラブからのフランクフルトやポップコーンの無償提供など、地元の方々の多大な協力のもとに実現できました。

私たちは、これらのイベントを通じて、休憩したい人、遊びたい人はもちろん、悩みや相談がある人など誰でも気軽に來ることができ、安心して時間を過ごせるような駅舎を作っていきたいと考えています。

ドローンなどで島の魅力をPR

私が上島町に住んで驚いたことがあります。島にはきれいなビーチ、美しい山などの自然がありますが、海で遊んでいる人やハイキングをしている方の姿はなかなか見かけません。そこで、魅力あふれる島を、より多くの住民や島外の方々に見てもらおうと、ドローンによる撮影を始めました。また最近、町のポストカードの作成やPR動画の制作も行なっています。

上島町の主要道路には、サイクリストの道標「ブルーライン」が引かれています。しかし、ブルーライン以外の道へ行く人はとても少ないように感じていました。町には、あまり知られていないものの、ぜひ足を運んでほしい非常



今年から始めたレンタバイク事業。

私は、田舎では人との出会いが少なくなってしまう。しかし、上島町で暮らすと地元のさまざま

人とのつながりを実感できる島の生活

にきれいな場所や道がたくさんあります。また、来年には岩城島と生名島をつなぐ岩城橋が開通予定で、行動範囲が広がることで、町全体の観光振興につながれると思います。そこで、今年から原付バイクのレンタル事業とツアーを開始しました。

私たちは、上島町で働くことができて、とても幸運だと感じています。地元の人々や企業はとても協力的で、さまざまな場面で私たちを支えてくれます。とくに驚いたのは商工会で、ニュージールランドにはこのような組織はありません。私は、事業を起

な方と会う機会が多く、そこから深い付き合いにつながっていくこともしばしばです。町外から来る人もたくさんいるので、都会にいた時よりもむしろ友人が多いくらいです。コロナウィルス感染拡大を契機に、日本では大都市から地方への転出を考えている人が増えたとされます。今後、都市がいかに住みにくく、ストレスの多い生活なのか、より明確になってくるのではないのでしょうか。

私自身、過去を振り返ると「都会生活は自分の世界だけで完結していて、さまざまな選択や意思決定は自分自身の利益のみを基準に行なっていた」ように思います。しかし、島という小さなコミュニティに住んでいると「すべての人がつながっていて、同じ世界に暮らしている」ことを実感できます。情けは人のためならず——たとえ小さなことであっても誰かを助ければ、その善行が自分に戻ってくる、弓削島、上島町はそんな社会です。



マシュー・トーマス・ピーターセン
ニュージーランドのニューブリマス出身。マレーシア人の母、ニュージーランド人の父を持つ。現在、兵庫県出身の妻・ももこと一緒に、飲食店店員・ツアーガイド・ゆげ海の駅舎管理・レンタバイク経営・ドローンによる映像制作・翻訳業など複数の仕事を組み合わせて生計を立てている。愛称は「マッパ」。